資料５

「公平負担のための受信料体系の現状と課題に関する研究会」第９回会合ヒアリング資料

平成２０年２月８日

日本放送協会

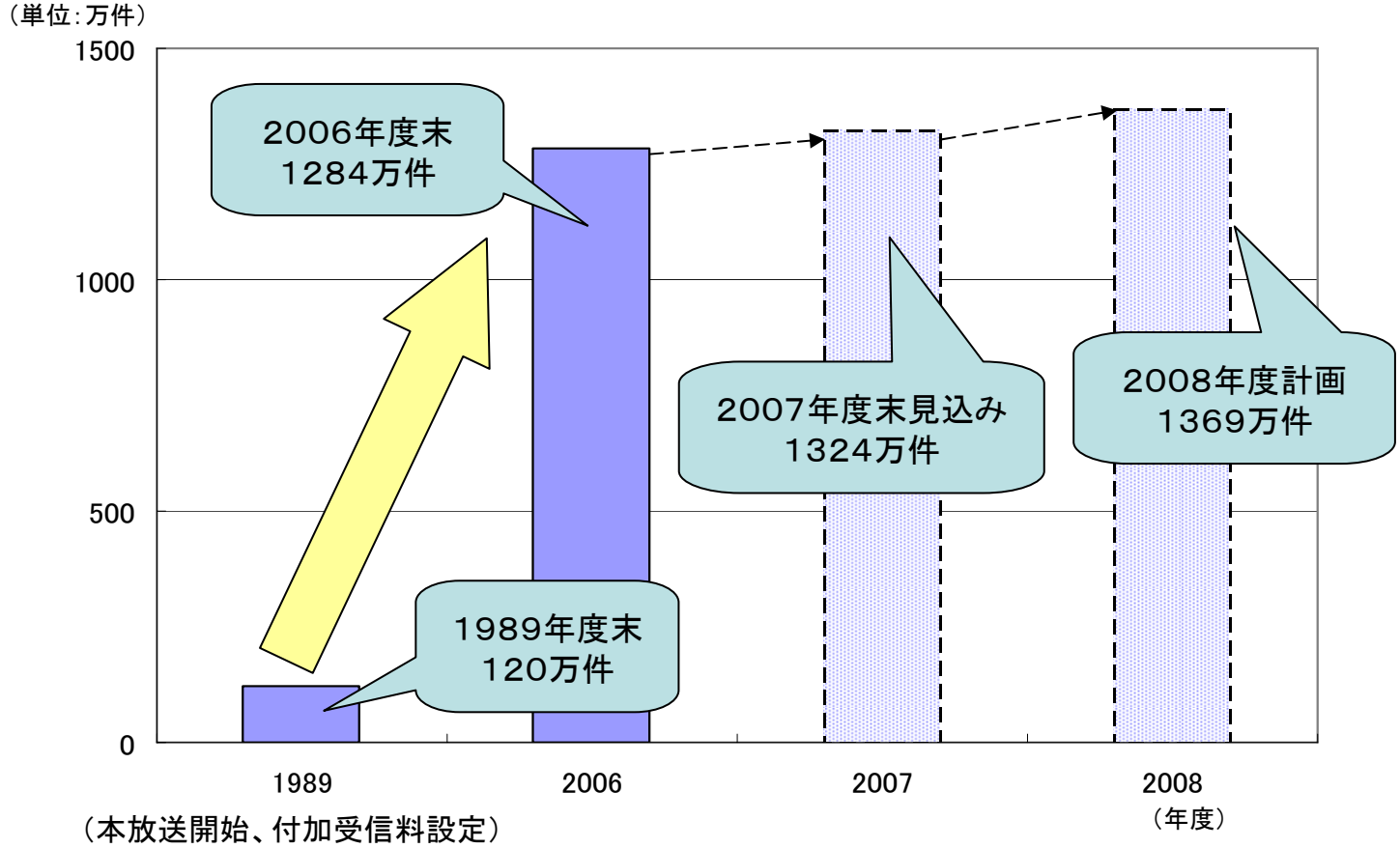
１　衛星受信料について、現在どのような問題が指摘されているか

1　衛星受信料についての課題

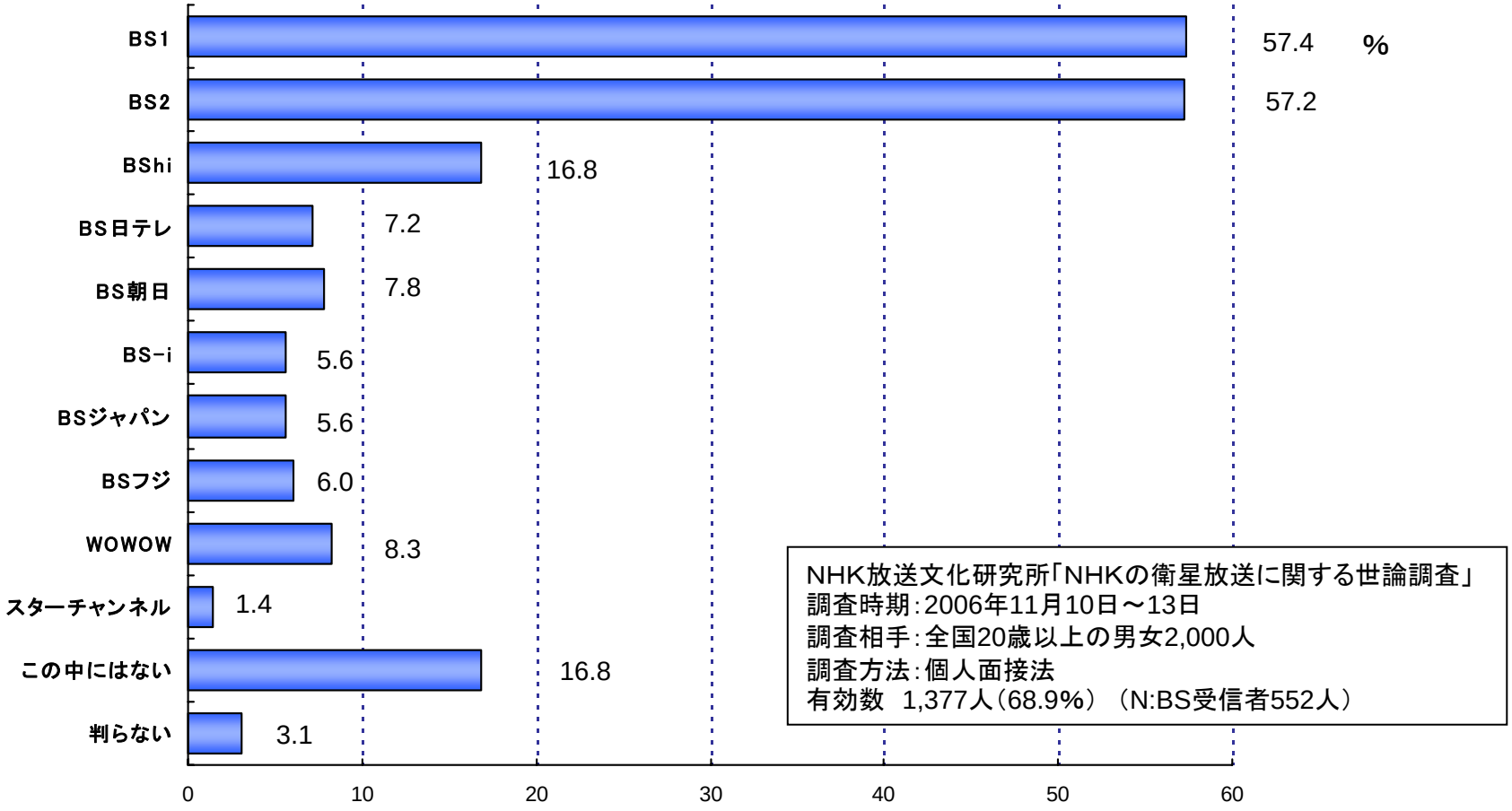
◆ 衛星受信料について、どのような問題意識を持っているか。

◆ 衛星付加料金制度は、順調に推移

衛星契約数（有料）の推移



よく視聴するBS視聴チャンネル



- 一方で、次の課題もある
  - 地上契約も含めた「面接困難」
  - 衛星契約固有の「受信把握の困難」

受信確認メッセージの運用

◆ 視聴者から寄せられる意見の中ではどのような問題が指摘されているか。

◆ 視聴者コールセンターへの意見の例（2008年1月）

- NHKの対応に関するもの
  - 訪問したスタッフの対応が不十分・不適切
  - 支払額が変わるときには事前の案内を　など
- 衛星受信料を支払うことに関するもの
  - マンション等共同受信、ケーブルテレビで受信可能だが支払いたくない
  - スクランブルにすべき
  - 配線をしていないので支払いたくない　など
- 現行の受信料体系等に関するもの
  - 月単位の支払いはおかしい
  - 料金が高い
  - 衛星のみの受信の場合の料金があるべき　など
- 衛星放送の番組・サービス、評価に関するもの
  - 地上と同じ番組が多い
  - BSをつけてよかった　など
- 不公平の解消の要望

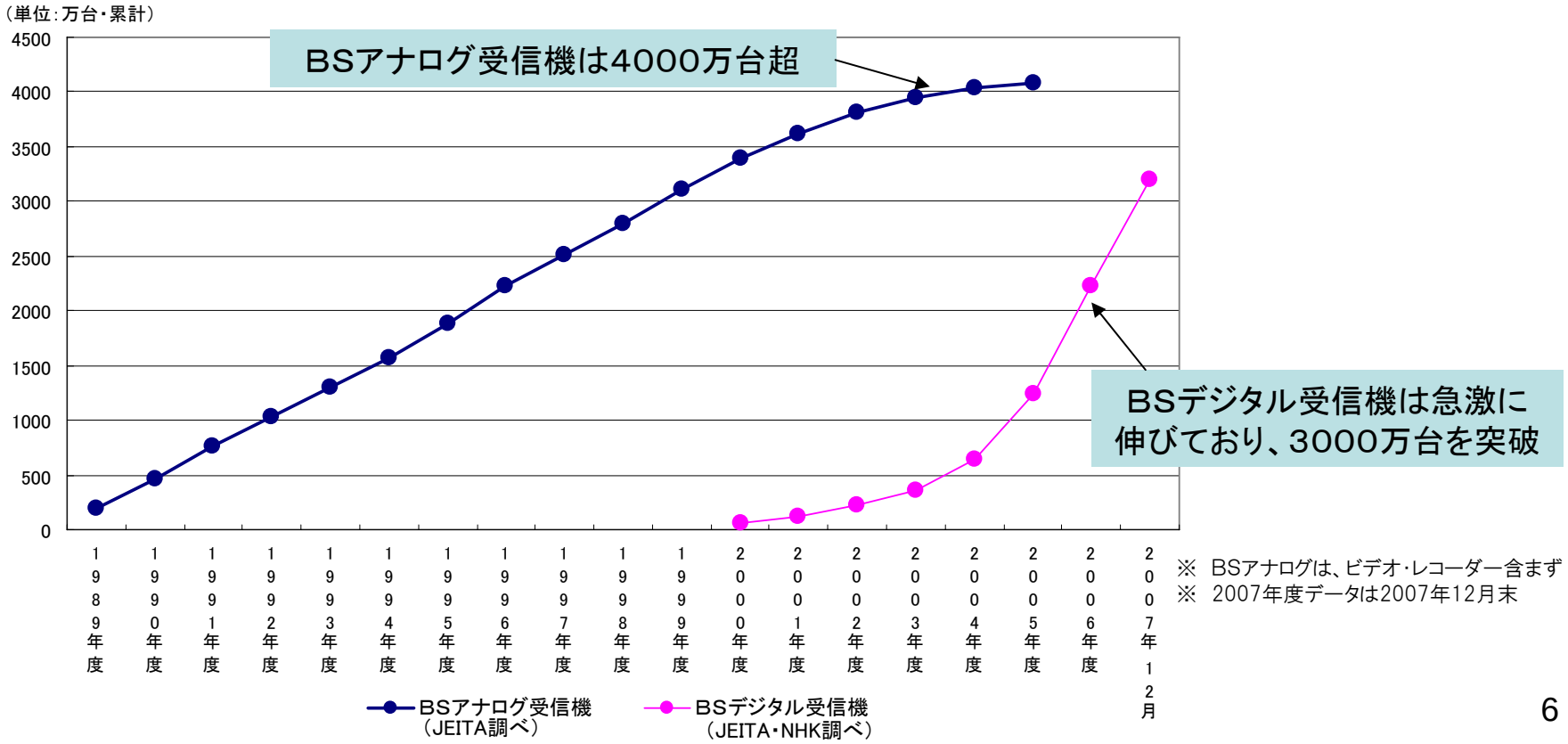
２　衛星受信料を設定した当時と現時点で、異なる要素は何か

2（1）衛星放送の普及状況の変化

◆ 衛星放送を受信可能な受信機の普及状況は、どのように変化してきているか。
また、今後の見通しはどうか。

◆ 衛星放送を受信可能な受信機の台数は、年々増加

衛星放送受信機の出荷台数の推移

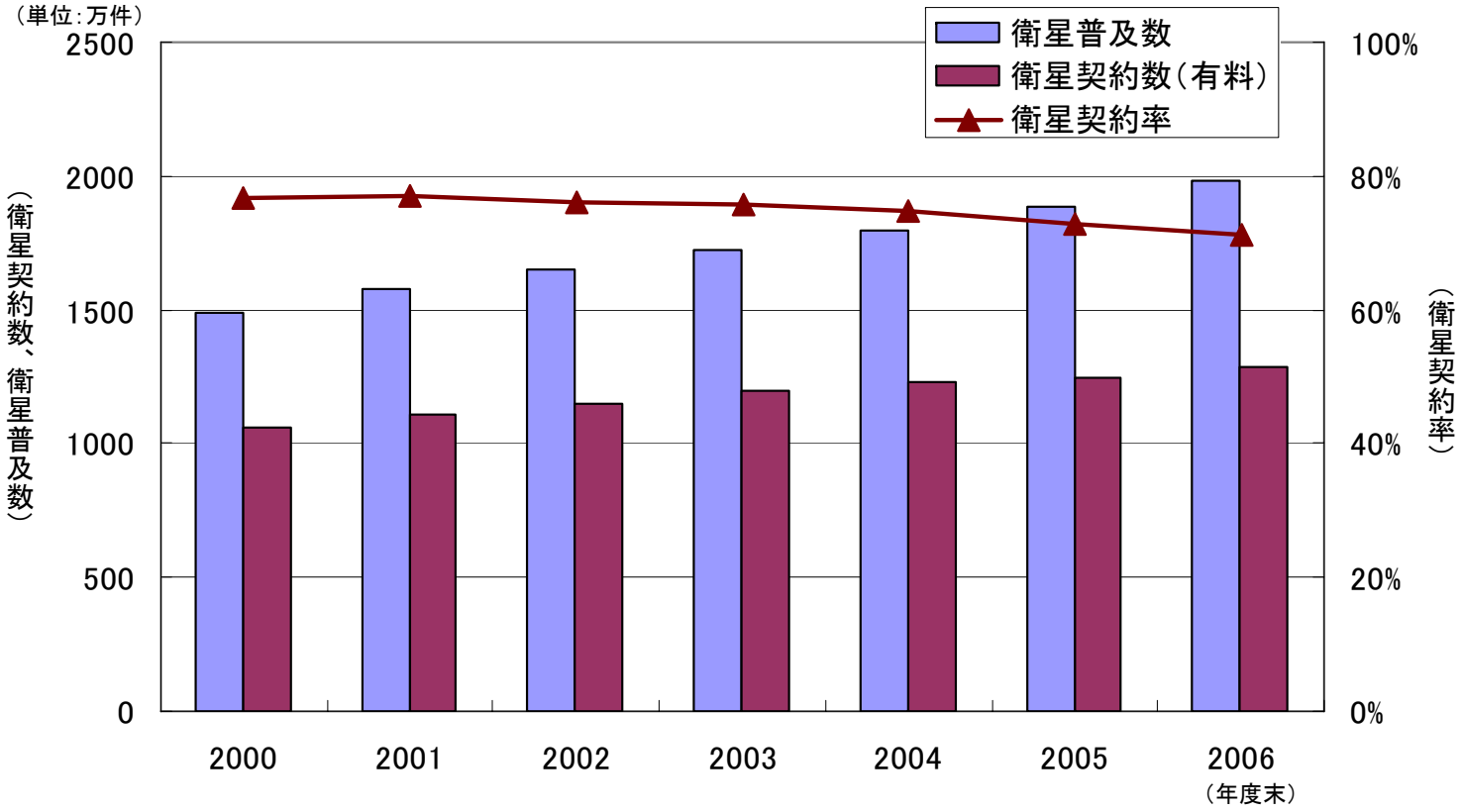


※ BSアナログは、ビデオ・レコーダー含まず
※ 2007年度データは2007年12月末

◆ 衛星契約数・衛星契約率はどのように変化しているか。また、今後の見通しはどうか。

◆ 衛星放送受信機の普及にあわせ、衛星契約数も年々増加

衛星契約数、衛星契約率などの推移



２（２）放送技術の進展

- アナログ放送のスクランブル技術とデジタル放送のスクランブル技術はどのように異なるのか。

- アナログ放送
  - 専用セットトップボックス（デコーダー）を契約者に配付

- デジタル放送
  - Ｂ－CAS方式による受信機の共通化

    （運用経費の削減、ユーザーの利便性の向上）

◆ 現在、衛星デジタル放送については、確認メッセージの表示を行っているが、どのような仕組みで表示や解除を行っているのか。

◆ NHKの受信確認メッセージの制度的位置づけ

■ 郵政省の整理した考え方（平成12年2月）

- NHKが検討していたメッセージ・システムの導入について、公共放送としてのNHKの性格に照らして「適当」と整理

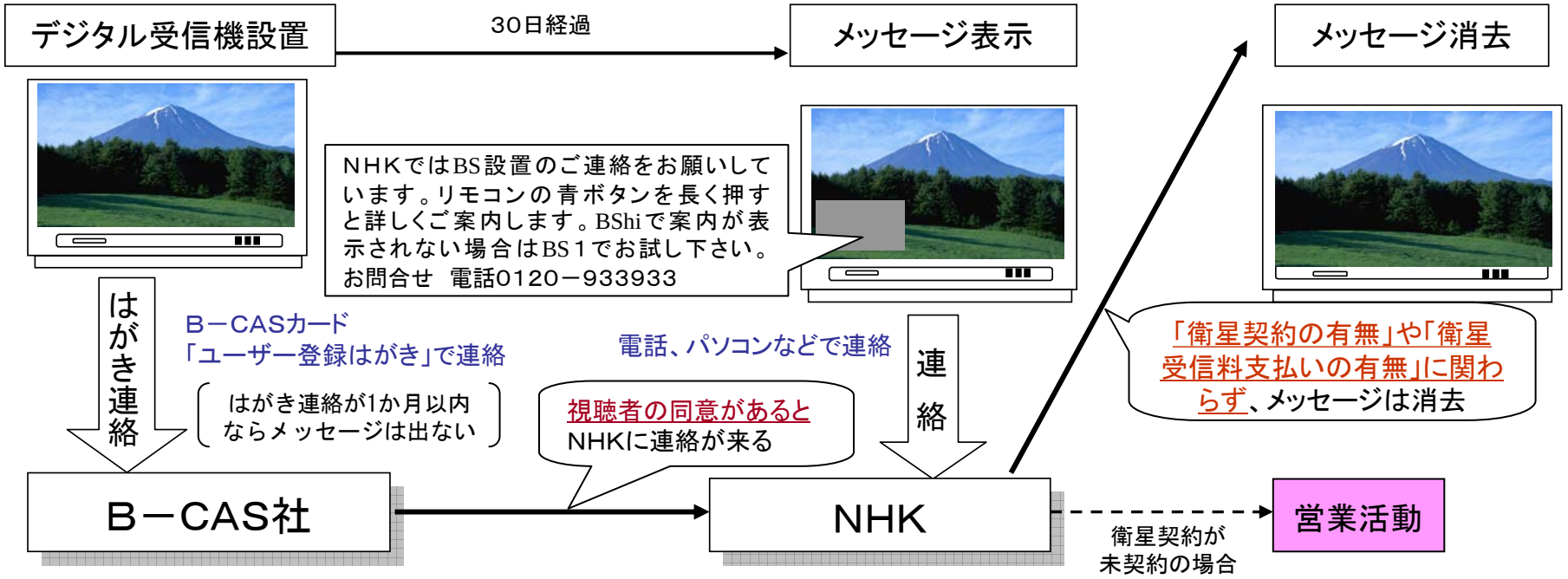
【郵政省の整理した考え方】
○ メッセージの表示について、表示面積、表示位置、表示時間等が工夫されており、テレビの画面や字幕・テロップが全く見えなくなるスクランブル放送のような運用ではないなどから、だれでも手軽かつ容易に視聴できるというNHKの放送の基本的性質に変化は生じない
○ 受信料の支払の有無にかかわらず、連絡があった場合には、一律に表示を消去することから、未払者への支払い強制になるものではない　等

- その際、郵政省では、NHKが実施を検討しているシステムの概要を示したうえで、郵政省として整理した考え方についての意見募集を実施（平成11年12月）

■ 郵政省告示（平成12年）

- 「契約の締結の円滑化を図るための情報」

- NHKにおける受信確認メッセージの目的
  - BSデジタル放送の受信確認（BSデジタル放送の受信の事実と住所、氏名の確認）
- 仕組み
  - BSデジタルの放送波を通じて共通のメッセージを表示（30日後）
  - 消去のご連絡をいただければ、放送波を通じて、メッセージ非表示信号を送信し、消去
- 運用



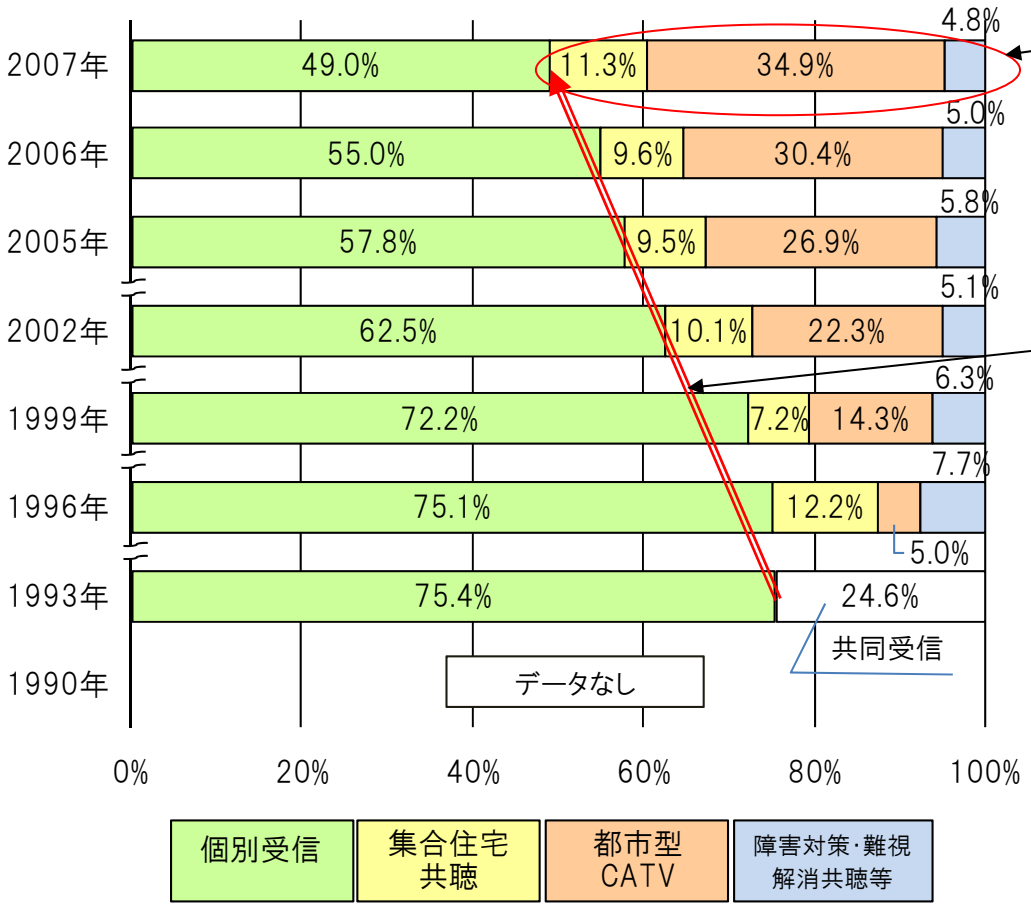
（参考）Ｂ－CASカードの機能

Ｂ－CASカードの機能	利用する放送事業者
①　有料放送の視聴制御 カードを挿入したうえで、有料放送の視聴契約に基づきスクランブルを解除	BS有料民放　2社 CS有料民放　1社
②　メッセージ表示 カードを挿入したうえで、事業者への連絡によりメッセージを消去	NHK（BSの受信確認） BS有料民放2社（契約促進） CS有料民放1社（契約促進）
③　著作権保護 カードを挿入しさえすれば、スクランブルは解除	NHK 地上無料民放　127社 BS無料民放　7社

2(3)衛星放送の受信環境の変化

◆ 衛星放送の締結者の受信環境はどのように変化しているか(パラボラアンテナの自己設置、共聴施設による共同受信、CATVによる共同受信等)。

衛星放送の受信設備の推移



共同受信施設による受信が個別受信を超える

パラボラアンテナによる個別受信が減少し、都市型CATVによる受信が増加

出典:「NHK受信実態調査」
(NHKが受信契約世帯を対象に行っている調査)

<調査概要(2007年)>
調査期間:2007年7月
調査方法:事前に調査票を郵送のうえ、NHK職員等の訪問による面接・宅内調査
調査対象:受信契約世帯4500世帯(無作為2段階抽出法)
調査有効数(率):3034世帯(67.4%)

２（４）視聴者ニーズの変化
（５）NHKの衛星放送の番組編成の変化
（６）NHKの衛星放送のチャンネル数、衛星放送に係る収入と経費の推移

- 衛星放送に対する視聴者ニーズはどのように変化してきているか。
- NHKの衛星放送に対する視聴者ニーズはどのように変化してきているか。
- これらをどのように評価しているか。
- 番組編成上、地上波との差別化をどのように図っているか。また、差別化の方針は衛星放送の開始時からどのように変化しているか。
- 衛星放送のチャンネル数、衛星経費はそれぞれどのように変化してきたか。
- これらをどのように評価しているか。

視聴者がBS放送を受信する主なきっかけ

衛星放送（BS）で見たい番組やジャンルがあったから	19%
今までよりもっと多くのチャンネルを見たかったから	18%
高画質・高音質の放送を楽しみたかったから	13%

視聴者が魅力に思う、地上波と異なるNHKBS放送の特色

スポーツ中継が多いこと	21%
スポーツやライブ、ステージの多くをノーカットで最後まで放送していること	21%
映画を多く放送していること	21%
海外のニュースや番組を多く放送していること	15%
なつかしのドラマや貴重な映像資料など過去の名作番組を放送していること	14%
地上放送では取り上げられることの少ない趣味やスポーツの番組を放送していること	9%
さまざまなジャンルの長時間スペシャル番組を放送していること	9%
音楽番組などを高音質で放送していること	7%
番組によっては、NHK総合テレビと異なる時間帯で放送している番組があること	7%
番組によっては、NHK総合テレビより早く見られる番組があること	7%

いずれも「衛星放送に関する世論調査2007」（NHK放送文化研究所）から
＜調査概要＞
調査期間：2007年3月9日（金）～12日（月）
調査方法：個人面接法
調査対象：全国20歳以上の男女2000人（層化2段階無作為抽出法）
◆調査有効数（率）：1315人（65．8%）

NHK衛星放送のチャンネル数、サービスの充実、普及数、収支の推移

	衛星放送のチャンネル数	衛星放送サービスの充実	衛星普及数（年度末）	衛星放送に係る収入	衛星放送の実施に要する経費
平成元年度（1989）	■BS1、BS2本放送開始 ■ハイビジョン実験放送開始	●衛星映画劇場と視聴者投票の実施（BS2）	236（万件）	71（億円）	292（億円）
平成2年度（1990）		●サッカーW杯イタリア大会中継（BS1）	405	189	328
平成3年度（1991）	■ハイビジョン試験放送開始（ハイビジョン推進協会）	●「湾岸戦争」長時間ニュース（BS1） ●書評番組放送（BS2）	543	320	380
平成4年度（1992）		●バルセロナ五輪の全競技中継（BS1） ●五輪初のハイビジョン中継（ﾊｲﾋﾞｼﾞｮﾝ） ●BS独自の定時ニュース開始（BS1）	701	460	406
平成5年度（1993）		●定時の紀行番組放送開始（BS2）	810	559	471
平成6年度（1994）	■ハイビジョン実用化試験放送開始（民放との時分割免許）	●「日本百名山」放送（BS2） ●ハイビジョンによる週刊定時ニュース（ﾊｲﾋﾞｼﾞｮﾝ）	907	638	543
平成7年度（1995）		●大リーグ生放送（BS1）	1,014	707	656
平成8年度（1996）		●海外からの移動生中継番組（BS2）	1,124	800	730
平成9年度（1997）		●公開番組「BS日本のうた」開始（BS2）	1,231	884	843
平成10年度（1998）		●1県を1日かけて生放送で紹介する番組（BS2）	1,327	953	895
平成11年度（1999）			1,410	1,013	964
平成12年度（2000）	■BSデジタル放送開始 ■BSデジタルハイビジョン放送開始	●世界の名画を高画質で紹介する番組（ﾊｲﾋﾞｼﾞｮﾝ）	1,492	,066	1,051
平成13年度（2001）		●データ放送を使った初の双方向番組（ﾊｲﾋﾞｼﾞｮﾝ）	1,574	1,119	1,239
平成14年度（2002）		●W杯サッカー日韓大会中継（BS1、ﾊｲﾋﾞｼﾞｮﾝ）	1,651	1,160	1,253
平成15年度（2003）		●韓国ドラマ放送（BS2）	1,727	1,197	1,207
平成16年度（2004）		●「列島縦断鉄道1200キロの旅」放送（BS2）	1,800	1,224	1,219
平成17年度（2005）		●ハイビジョンによる世界紀行番組（ﾊｲﾋﾞｼﾞｮﾝ）	1,882	1,193	1,182
平成18年度（2006）		●BS3チャンネルの編成改定	1,985	1,233	1,213
平成19年度（2007）	■アナログハイビジョン終了	●在外邦人とのネットによる双方向番組（BS1） ●未来に残すインタビュー番組（ﾊｲﾋﾞｼﾞｮﾝ）	—	1,268（見込み）	1,222（見込み）

2チャンネル体制

3チャンネル体制

番組の充実

普及の拡大

1000万件普及

1500万件普及

※衛星付加料金の月額：930円（平成元年8月～平成9年3月）、945円（平成9年4月～、消費税率改定）

２（７）NHKの衛星放送の性格

◆ 難視聴対策、先導的役割など、現在のNHKの衛星放送に期待されている役割をどのように認識しているか。

◆ 地上放送の難視聴解消対策を何らかの方法により実施することは、今後とも必要であると認識

◆ 準基幹波として位置づけられている衛星放送全体の普及を牽引する役割があり、フルデジタル時代においても、引き続き、公共放送として期待に応えていきたいと認識

2（8）民間放送事業者との競争の状況

- NHKと民間衛星放送事業者との関係についてどのように認識しているか。

- BS衛星放送事業者（テレビ）の推移
  - アナログ放送時代
    - NHKおよびWOWOWの2社のみ
  - 2000年12月1日
    - NHK、無料民放5社、有料民放2社が、BSデジタル放送を開始
  - 2007年12月1日
    - 無料民放2社が新規参入し、無料民放が7社に（合計10事業者12チャンネル）

- 新しい放送メディアの立上げや普及促進に向け、民放各社と共同で実施
  - 普及促進（BPA ⇒ Dpa）
  - 共通インフラの円滑な運用に向けた協力（放送衛星、CASなど）
  - 技術規格の策定への寄与

２（９）スクランブル化に伴う視聴者負担

- 現時点でNHKの衛星放送をスクランブル化した場合、視聴者負担はどの程度増えることが見込まれるか（負担を伴う新たな設備の設置の必要はないか）。
- ＢＳ放送の完全デジタル化後はどうか。
- これらをどのように評価しているか。

- 新たな設備の設置の必要性の有無
  - ＢＳアナログ放送：必要
  - ＢＳデジタル放送：不要